みおしえ

うず高い花をあつめて多くの華鬘をつくように、人として生まれてまた死ぬべきであるならば、多くの善いことをなせ。（法句経五三中村元訳）

《因縁》この法は、仏が、サーヴァッティに近い東園（ミガーラマーター殿堂＝鹿子母講堂）に住んでおられたとき、第一の女性信者ヴィサーカーについて説かれたものである。

コーサラ国の首都サーヴァッティにミガーラ長者が住んでいた。かれにはプンナヴァッダナという結婚適齢期の息子がおり、五種の条件、すなわち美しい髪、美しい肉（唇）、美しい骨（歯）、美しい肌、美しい若さをそなえている女性を求めていた。そこで長者は百八人のバラモンを招き、かれらにそのような女性を探してほしいと頼んだ。かれらは方々を探したが、見つけることができず、最後にサーケータへ行った。そこでヴィサーカーを見て、これこそ五種の条件をそなえている女性だと知り、ただちに報告され、結婚の話がまとめられた。それよりヴィサーカーの父親ダナンジャヤ長者は四ヶ月を費やし、結婚後にいかなる不足もないようにあらゆる準備をした。

彼女は、カッサパ仏（過去第六仏）時代に満たした布施波羅蜜の果報として得られたマハーラター（大葛）という絢爛豪華な衣装をまとい、サーケータを出発し、サーヴァッテイのシガーラ家に向かった。その沿道ではあらゆる人々が祝いの言葉と贈り物を届け、彼女はそのすべてを人々に分かち与えた。やがて盛大な結婚式と披露宴が行なわれた。婚家では義父を間違った信仰から仏陀の教えに帰依させ、多くの子孫を残し一族は繁栄した。これが法句五三の因縁話である。（ダンマパダ全詩解説　片山一良参照）

心の言葉

種々の花の束から多くの華鬘（花輪）を作ることができるように、死すべきものとして生まれた人間は、衣の布施などの多くの善を作るべきである。

お題目で成仏する十六

南無妙法蓮華経を唱える事による本仏と一体の境地に至るこの世に於ける成仏・即身成仏とは、煩悩におおわれた凡夫の身のままで仏に成ることを言います。自分の生命の根本にそなわる仏性を開き、安心の境界に至ります。これは、お題目を唱えることによって実現します。

大聖人はこの成仏の仕組みを次のように仰せです。

「正直に方便を捨て但（ただ）法華経を信じ、南無妙法蓮華経と唱ふる人は、煩悩・業（こう）・苦の三道、法身（ほっしん）・般若（はんにゃ）・解脱（げだつ）の三徳と転じて、三観（さんがん）・三諦（さんたい）即一心に顕はれ、其（そ）の人の所住の処（ところ）は常寂光土なり」（当体義抄）

題目を唱える功徳によって、自身の煩悩・業・苦の三道が転じ本仏の生命と一体となり（法身）、仏の深い智慧（般若）を獲得し、自分の狭いとらわれの心から（解脱）し人生を自由自在に楽しむことが出来ます。

煩悩とは、ぐち・怒り・足ることを知らぬ欲望などの身心を悩ましく煩わせる心のはたらきです。業とは、私たちをこの世に縛り付ける心と体の行為の習慣性です。苦しみとはこの世の生存にいろいろな苦を感じることです。

釈尊はこの煩悩・業・苦の解決のために、瞑想し八正道を行じ肉体的レベルの思考をとどめ、霊的意識となったのです。日蓮聖人はこの重大な肉体的意識から霊的意識の転換をお題目を唱える事によって実現しました。